
甘くて苦い少女たち

戸塚夢葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘くて苦い少女たち

【Nコード】

N6464Z

【作者名】

戸塚夢葉

【あらすじ】

普通の学園生活を望む、霧谷和也。しかし、その周りの女子のせいで現実以上の甘い日々を送ることになる。和也の事が好きになつてしまう人が増え、和也は誰と付き合うのか？

いつも通りの日々．．．のはずが！？

高校入学して1ヶ月。

ここまでは普通の人生。

オレ、霧谷和也の人生はここから桃色、否、黒色に変わっていった。他の、思春期の高校生ならこれを見て羨ましがらるだろう。

人の気も知らないで、と思う。

オレは、普通の暮らしがしたい。

金持ちでもなく、貧乏でもなく、ごくごく普通の一般家庭にあこがれる。と言っても、まだまだ先の話だが．．．

「今日も生きていられるかな．．．」

高校生の発する言葉じゃないことは十分わかる。

だが、心配なのだ。

ほら、また遠くから悪魔の怒声が聞こえる。

「コラーーーーー！！カズーーーーいつまで寝てんの！？」

うるさいなあ、と呟き家を出る。

「今日も、朝っぱらから無駄に元気の多いことで」

言った瞬間、鳩尾にパンチが飛ぶ。

ぐふっ、と吐いた。

「ったく、無駄とはどーゆ事！？無駄とは！」

「そうか、無駄という言葉の意味も知らないか、だったら辞書を開き．．．」続きを言おうとしたら殴られた。

「死んで生き返れ」

酷い言葉だ。

今日も生きていられますように．．．

地面に這いずりながら神様に願う。

そもそも、可愛い顔してこんなことを言うなんて、外見と内面の差がありすぎる。そのことを知っているオレは、この幼馴染の少女、柏木優奈に対して、恐ろしい、怖いなどの黒い感情を抱く。しかし、

この内面を知らない馬鹿共は、可愛い、好きなどという命知らずの感情を抱く。

学校に間に合うために少し早歩きをする。

オレが通っている、帝都学園では俺らは付き合っているということになっていた。必死に説明してようやく、噂が収まり、普通の学園生活を送れそうだ。

あのときは酷かった。オレも被害者なのに、殴るところか蹴られてしまった。死ぬかと思ったよ。

一緒に登校は、なんか普通って感じ。

幼馴染だから、別になんとも思わないし。

今日は、一緒に登校はしてない。なぜなら、さっき殴られ、地面を這いずってる間に行ってしまったからだ。

校門を過ぎ、教室に入った。

ここでまた悪夢が訪れる。

いつも通りの日々．．．．のはずが！？

ガラガラガラとドアを開けると、目の前に汚い泣き崩れた顔が近づいてくる。

「おわっ！なんだなんだ！？」

そう言ったのが聞こえたのかどうかわからなかった。

「和也ー」

泣きながらオレの名前を呼ぶ。

こいつは、鈴木祐樹。

オレの数少ない親友だ。

なにしろ、学園のアイドルらしい優奈と仲がよく幼馴染という位置のオレは恨まれることのほうが多かった。

祐樹の場合、ネットの中で生きているので嫉妬心というのは微塵もなかった。

その祐樹が泣き崩れている。特に珍しくもないが一応聞いてみた。

「どうしたんだよ？まずは鼻を拭け」

そう言ってハンカチを渡した。このハンカチは二度と使えないな．．

．．．

それから少しして、口を開いてくれた。

「朝にね、お前の幼馴染の柏木に、『オイ！お前の彼氏の和也君はどうしたのかなあ？』って言った瞬間に顔面にね、拳が飛んできたの」

そうか、自業自得だ。

助ける気など埃の様に去った。

その直後、後ろから鬼を纏った少女が来た。

もちろん星奈である。

「アンタ、こいつにどーゆーしつけしてんのよッ！ちょうどいいわ。アンタら二人とも．．．」

言い終える前に俺たちは教室から出て行った。

もちろん、速攻で捕まりボコボコに．．．
朝から体力が消えた。

当分、星奈の怒りは消えそうにない。

そして、また祐樹が命知らずな事を言った。

「アイツのスカートの中盗撮してくる」

知らんぞ、とだけ言って祐樹を見送った。

見たいわけじゃないよ？いや、思春期だし．．．見たいかなあゝ
そんなことを考えているうちに、祐樹が携帯を取り出す。

机の陰に隠れ、シャッター音を鳴らす。

バカだな．．．

光と音出てるよ。

当然、その直後に祐樹はボッコボコ。

享年十五歳。

ご愁傷様で。

それだけならよかった。

優奈がオレのほうに向かってくる。

「ゆ、優奈．．．？」

聞こうともせず、腹にフック、顎にアッパーそしてとどめに踵落とし。

死亡時刻 午前八時二十五分。

それから、オレは気を失い、気づいたら保健室のベッドの上だった。

「お目覚めですか？」

傍から優しい声が聞こえた。

誰だろう？

起き上がって見ると、そこには黒い髪の綺麗な人がいた。

いつも通りの日々．．．のはずが！？

起き上がるとそこには黒い髪で長くストレートの女子がいた。

「ここはどこだ？」

辺りを見回しているオレに声をかけてくれた。

「保健室ですよ。大丈夫？」

心配されていた。

そういえばオレは、優奈に殴られ気絶して．．．ってことはずっとここに！？

「あの、今何時．．．ですか？」

ふふっ、っと笑ってその子が答えてくれた。

「もう4時ですよ」

にこにこしながら答えた。

4時．．．ってオレは朝からずっと寝てたのか！？

情けねーと思いながら、起き上がる。

そして、今更だがオレを手当てしてくれた人にお礼を言った。

「あの、ありがとうございます。失礼ですけどお名前は．．．？」

にこやかなまま答えられた。

「私は、櫻井紫苑。2・3です。」

へえー2年なのかぁとオレは言った。

「に、2年！？」

驚いたオレはすぐさま謝った。

「すみません！2年生とは知らず、失礼を。」

「いいんですよ。すぐに言わなかった私にも非はあります」

なんていい人なんだ。星奈とは大違いだ。

にしても、情けない。

女の攻撃で約8時間も気絶するとは．．．

今すぐ、家に帰ろう。

「あの、ありがとうございました。帰ります」
そう言つて、保健室を出た。

お大事に、と紫苑先輩は言ってくれた。
優しすぎる先輩、この出会い方はまさに2次元世界!!!
若干、興奮したがすぐに溜息とともに消え去った。

校門の前に優奈が立っていた。

「遅い！いつまで待たせるつもり!？」
顔を赤くして後ろを向きそう言つた。

「お前がそうしたんだろ」
地雷を踏んだ。

「アンタが弱すぎんのよ!!!」
やばい、と思つてすぐに謝りお礼を言つた。

「悪かつたよ。でも待つててくれてありがとう」
ん？優奈が耳の後ろまで赤くなつてゐるぞ？

女というものはよくわからない。

「そ、そんなことより！早く行きましょ！バイトしなきゃ」
そう、オレの家はパン屋だった。

一見、地味そうに見えるがかなり難しい。

わけあつて、優奈がバイトとして手伝つてくれるのだ。

店の名前は、「ベーカリーブレッド」

なんか、めっちゃくちゃだった。

そりゃそうだ。だつてオレの姉貴が付けたんだもん。

店の前に着きドアを開けると、いきなり視界に巨乳が……

「遅かつたな」

いきなり目の前に現れた。

「おわっ！」

「おわっ！とは何だ！人の顔を見るなり！」

そういうわけじゃないよ姉さん。いきなり現れたからしょうがない
つて。

「おお！優奈君。来てたのか。入りたまえ」
お邪魔します、と言って優奈が入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6464z/>

甘くて苦い少女たち

2011年12月21日21時53分発行